

**クリミア戦争と東方問題**

2) 3) 4) 5) は何度も熟読せよ。きわめて難解かつ頻出。

## 1) 東方問題とは何か?

ナポレオン戦争以降、ヨーロッパ各地で自由主義を求める運動や民族運動が高まった。衰退段階にあった老帝国、【1】

】帝国の支配下に置かれていた諸民族も独立運動を始めた。オスマン帝国の衰退に乗じて、支配下の民族の独立運動が激しくなる中で、ヨーロッパ各国がオスマン帝国領内への勢力拡大を図り、殊に南下政策をとるロシアとこれを阻止しつつ勢力を広げようする西欧列強が干渉して起きた一連の事件を西欧列強の側から見て【2】】と言う。

ロシアは黒海・バルカン半島方面に於いて以下の意図で行動した。これをロシアの【3】】と言う。東欧や中央アジア・極東への進出も行ったがこれらは普通は南下政策とは呼ばない。

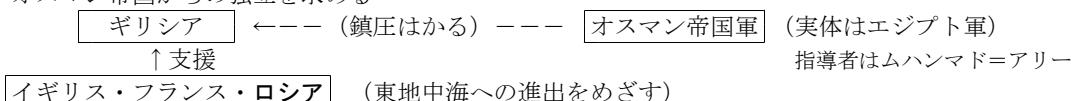
黒海及び、【4】】の自由通行権を確保すること。

【その意味】不凍港と地中海への出口確保は、穀物の輸出ルートを確保し、および軍事行動の自由度確保の点で重大な意味を持つ。

【具体化】ロシアは①ギリシア独立戦争【後掲2】、②第1次エジプト=トルコ戦争【後掲3】では【4】の自由通行権確保そのものを追求し、③第2次エジプト=トルコ戦争【後掲4】には参戦しなかつたが、②の成果を奪われた。④クリミア戦争【後掲5】ではトルコと直接戦い、バルカン半島に勢力を広げることを通じて【4】の自由通行権確保を図った。①ではほぼ成果無し、②では一時的に実現したが、③で英、仏、普に阻止され、④では英、仏、サルデーニヤに阻止された。挫折したロシアの目は極東に向けられた。

## 2) ロシアは南下政策のため、ギリシア独立戦争(1821-29年)では英仏とともにギリシア側についた。

オスマン帝国からの独立を求める



補足：イギリスの詩人バイロンが従軍（戦病死）、ドラクロワの作品「シオの虐殺」は必見。

ロシアの目的はダーダネルス・ボスフォラス両海峡の自由通行権確保。典型的な東方問題である。

ギリシア独立戦争は、独立側が、1827年、ナヴァリノの海戦に勝利。

1829年、アドリアノープル条約で独立達成。正式には1830年の【5】】で承認された。 06C

ロンドン会議は3つある。第2次エジプト・トルコ戦争処理のロンドン四国条約を締結した1840年のロンドン会議。

これは10年後なので混同に注意せよ。米英日の補助艦の保有比率を10:10:7に定めたのは1930年のロンドン会議。

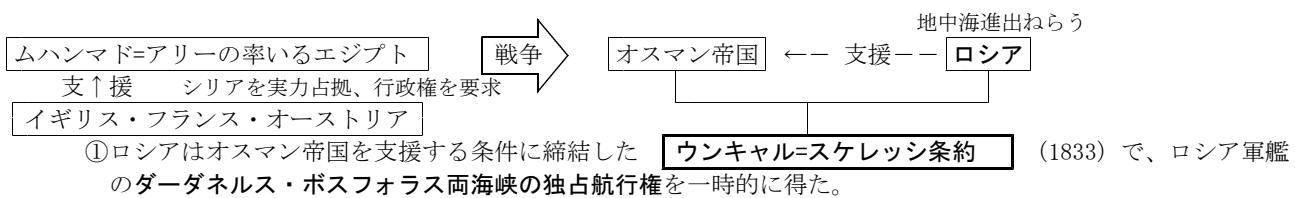
アドリアノープル条約は、ロシア・オスマン両帝国間の講和条約で、エディルネ条約とも言う。その骨子は

①ギリシア独立の承認 ②黒海におけるロシア船の自由通行権の承認（両海峡は含まない）

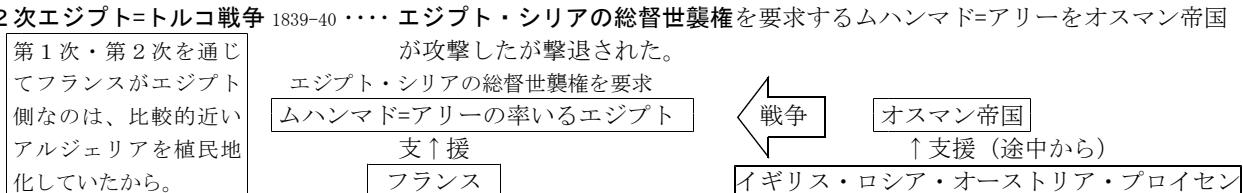
## 3) ロシアは第1次エジプト=トルコ戦争では、オスマン帝国側についた。（トルコとはオスマン帝国のこと）

オスマン帝国は民衆の信望あついムハンマド=アリー任1805-49をエジプト総督に任命せざるをえなかつたので、エジプトは事実上の独立に近い状態（むしろオスマン帝国を凌ぐ勢い）だった。ムハンマド=アリーは、ギリシア独立戦争にオスマン帝国側で参戦したことの見返りに（既にクレタ島・キプロス島を得ていたが）【6】】の行政権を要求して開戦した。真の目的はオスマン帝国からの独立だった。

**第1次エジプト=トルコ戦争** 1831-33……エジプト軍がシリアからアナトリアに侵入（1831～32）すると、マフムト2世はロシアの支援を要請し、ロシアはダーダネルス海峡に出兵（1832）した。ロシアの影響力拡大を恐れた英仏は、マフムト2世にシリアの行政権をエジプトに譲渡させた（キュタヒヤ条約 1833）。これに不満なマフムト2世は密かにロシアとウンキヤル=スケレッシ条約（1833.7.8）を結び、ロシアの支援を得た。



## 4) ロシアは第2次エジプト=トルコ戦争後のロンドン四国条約でウンキヤル=スケレッシ条約を否定された。

**第2次エジプト=トルコ戦争** 1839-40……エジプト・シリアの総督世襲権を要求するムハンマド=アリーをオスマン帝国

緒戦ではエジプトはフランスの支援を得て圧勝し、ムハンマド=アリーは一時にエジプト・シリアの総督世襲権を得た！途中からイギリス・ロシアがオスマン帝国を支援、オーストリア・プロイセンも同調、フランスもエジプト支援を断念、ムハンマド=アリーはイギリス軍に大敗した。なお、オスマン帝国が緒戦に敗北した1839年にマフムト2世死去、アブデュルメジト1世（後にタンジマートを行う）が即位。

イギリスは、オーストリア、プロイセンをさそって干渉し、【7】】（1840）を開催、ロシアの特権を否定し

た。この時締結されたのが【8:

】。翌1841年フランスも加わって五国海峡協定が結ばれた。

#### ロンドン四国条約の要点

- ①【9:】の破棄=ロシアの特権を否定
- ②ムハンマド=アリーのエジプト・スーダン総督世襲権を承認（シリアは放棄させる）  
これがいわゆる「ムハンマド=アリー朝」1805-1952の由来である。なお、スーダンは既に1821年、ムハンマド=アリーに征服されていた。

1841年、フランスも含む五国海峡協定が締結され、ダーダネルス・ボスフォラス海峡の外国軍艦の航行は禁止された。

ダーダネルス・ボスフォラス海峡は中立化され、ロシアの「南下」は阻止された。

それでもなお、ロシアは黒海とバルカン半島の一部に影響力を持っていた。

ついにロシアは、オスマン帝国と直接戦い、バルカン半島に勢力を得ることを通じて目的の達成を図る方向に転換した。それがクリミア戦争（後掲）。



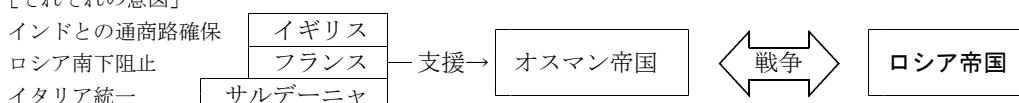
5) 1回目のロシア帝国・オスマン帝国間の戦争を【10: 戰争】1853-56という。

2回目がロシア=トルコ戦争（1877-78露土戦争）だが、これを「第2次ロシア=トルコ戦争」とは言わない。

発端はオスマン帝国領だったイエルサレムの聖地管理権をカトリック教会と正教会とが争い、フランスの要求でオスマン帝国がこれをギリシア正教会から奪ってカトリック教会に与えたこと（1852年）。ロシアはオスマン帝国に圧力をかけたが、オスマン帝国はイギリスとフランスの支持を頼りにこれを拒否した。そこで、ロシアは、オスマン帝国領内のギリシア正教徒保護を理由に、オスマン帝国の宗主権のもとで自治を与えられている【11: 】と【11: 】（後のルーマニア）に軍隊を派遣し、1853年10月、【11】を占領した。両国は宣戦布告もなしに開戦した。開戦を決断したのは、【12: 】位1825-55である。彼は、終戦を待たず急死し、アレクサンドル2世 位1855-81に交替した。

#### [クリミア戦争 対決図式]

【それぞれの意図】



英仏は科学的兵器、合理的用兵、十分な兵站でロシアを圧倒し、夥しい戦死者が出た。

1856年、ロシアは【13: 】の激戦に敗れ、【14: 】条約が締結された。

この要塞はクリミア半島のロシアが誇る最強の要塞。黒海最大の軍港でもある。クリミア戦争の名称はここから来ている。

「1856年の【14】条約」の骨子： この条約締結時の英首相はペーマストン。07A

- ①ロシアの南ベッサラビア放棄（ベッサラビアとはモルダヴィアの東側に隣接する地域）
- ②オスマン帝国の独立とその領土の保全
- ③ドナウ川航行の自由
- ④黒海の中立化、オスマン帝国軍以外の軍艦の両海峡通航は原則的に禁止。

…これで、ロシアは黒海に艦隊をおくことすらできなくなった。

クリミア戦争はロシアの敗北に終わり、1856年のパリ条約で黒海の中立化が決まり南下政策は再び挫折した。クリミア戦争は、同時に、大国間協調体制であるウィーン体制を最終的に崩壊させた戦争でもあった。

（一般には、ウィーン体制は1848年の諸革命で崩壊したとされるが）

ロシアは、両海峡自由通航どころか黒海に艦隊を置くことすらできなくなった！

この敗北でロシアの後進性は一層明らかになった。

6) 補足 クリミア戦争と言えば【15: 】裕福な家庭に育ちロンドンの病院の婦長だったナイティンガール 英1820-1910はクリミア戦争の報道に接し34名の看護師とともに野戦病院に赴き敵味方を問わず傷病兵の看護に活躍した。彼女の活躍に深く感銘したデュナン スイス1828-1910は戦時における傷病兵の救護活動を目的とする国際赤十字社を設立し最初のノーベル平和賞を受けた（1901）。1864年、16ヶ国が参加して赤十字条約が結ばれた。

これと並んでよく出題されるのは、1896年に国際オリンピック大会が開催されたことである。1896年 アテネ、1900年 パリ、1904年 セントルイス…。ロンドンは3回、アメリカでの開催は4回。1916・1940・1944年は大戦で中止。1936年のベルリンはナチス統治下。1980年 モスクワでは39か国が、1984年 ロサンゼルスでは20か国がボイコット。

7) 補足 パリ条約は主なものだけでも3つある。天津条約も3つある（1858・1885・1885年）。巻末記入例に解説掲載  
1763年のパリ条約 七年戦争と【16: 】戦争の終結に際し締結。

1783年のパリ条約 米英間で締結された【17: 】戦争の講和条約。

1856年のパリ条約 前掲の通り

ロシアとオスマン帝国の戦争はこれで終わらなかった。ロシア・トルコ戦争（1877-78年 露土戦争）については別に学ぶ。